

シンポジウム「学校で動物を飼うことの意味」

～大田区立赤松小学校の実践から～

大田区立田園調布小学校校長 茂呂美恵子



1 はじめに

(1) 生活科の目標との関連

平成32年度から全面実施される新学習指導要領において、生活科の目標には、「具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方や考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目指し、

- ・活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- ・身近な人々、社会および自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- ・身近な人々、社会および自然に働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。」とある。

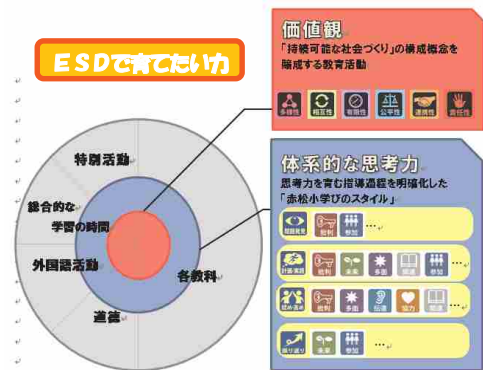
このように生活科で目指している児童育成の視点は、後に述べるが、正しく動物飼育の活動を通して育まれるといえる。

(2) 持続可能な開発のための教育の推進

赤松小では、ユネスコスクールに加盟し、これからの教育が目指すべき指針といっても過言ではない、ESD (Education Sustainable Development) つまり「持続可能な開発のための教育」を、全教育活動を通して推進してきた。

そこでは、まず、ESDで育てたい力を、『価値観』と『体系的な思考力』で捉えた。(図1参照)そして、ESDで育むべき能力・態度を次の8つの観点で整理し、

- ① 本質を見抜く力 (批判的思考力のこと)
- ② 未来像を予測して計画を立てる力
- ③ 多面的, 総合的に考える力
- ④ コミュニケーションを行う力
- ⑤ よりよいものを創り出していく力
- ⑥ 他者と協力する態度
- ⑦ つながり方を尊重する態度
- ⑧ 進んで参加する態度



(図1)

ESDで育むべき能力・態度

- ①本質を見抜く力
- ②未来像を予測して計画を立てる力
- ③多面的, 総合的に考える力
- ④コミュニケーションを行う力
- ⑤よりよいものを創り出していく力
- ⑥他者と協力する態度
- ⑦つながり方を尊重する態度
- ⑧進んで参加する態度

(図2)

(図2参照)，その8つの資質・能力と問題解決の力をリンクさせて整理したものが図1に提示した体系的な思考力であり、また、同時に、多様性(いろいろある)、相互性(かかわり合っている)、有限性(限りがある)、公平性(一人一人を大切に)、連携性(力を合わせて)、責任性(役割や責任をもって)の6つの『価値観』の育成を通して、育てたい力を考えてきた。

したがって、動物飼育の実践においても、このESD(持続発展教育)の観点で、重要な資質・能力、及び価値観が育まれてきたといえる。以下、実践した取り組みに、『価値観』と『ESDで育むべき能力・態度』を位置付けて示していく。

2 動物飼育に関わる実態

(1) 学校飼育動物について

平成元年からモルモットの飼育をスタートし、現在はモルモット5匹、ウサギ1匹を飼育している。また、平成28年度から引き続き31年度まで、東京都小学校動物飼育推進校の指定を受けている。

モルモットは、低学年児童昇降口でゲージにて飼育している。主に低学年児童が中心に世話をしており、飼育場所が昇降口のため日常的に様々な学年の児童と関わりがもてるようになっている。

ウサギについては、校庭の飼育小屋で委員会児童が中心となって世話をしている。

(2) 飼育の仕方について

モルモットについては、1・2年生が生活科の学習の中で年間を通し、継続的に飼育している。4月から11月は2年生が、12月から3月までは1年生が、餌やりや水換え、糞の始末等の当番活動を毎日、校内の清掃時間を利用して行い、週に2回程度は生活科の時間を利用して学級毎にゲージ全体の清掃や体調観察等を丁寧に行っている。

その際に、モルモットと交流する時間を設けたり体重の計測や健康観察の記録をとったりしている。

また、飼育の継続性を重視するために飼育日誌を作成し、モルモットの健康状態の把握に努めている。

さらに、モルモットとの全校のふれあいも重視している。飼育に関わる特定の学年とのつながりだけでなく、全校児童にとってのモルモットとの交流を保障するため、週に2回程度、休み時間に『ふれあいタイム』を設けている。

また、モルモットの飼育で見逃せないことの一つに、飼育場所がある。赤松小では、1・2年生の昇降口が飼育場所であるため、全校の児童の目にふれやすい場所である。そのため、モルモットの体調の異変についても、他学年の児童がよく報告に来る。

このように年間を通してモルモットの世話と触れ合いの活動をしており、小動物への愛着は継続して育まれている。



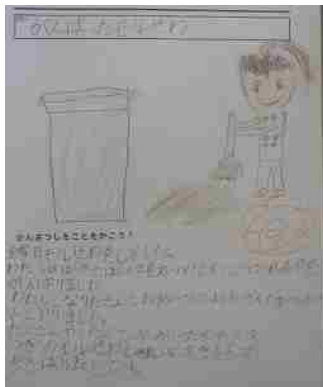
2学期後半には約1ヶ月かけて、2年生から1年生へ飼育活動の引き継ぎが段階を追って丁寧に行われている。



次に、教室で行うモルモットの観察カードに記録された内容の一部を紹介すると、



- ・気持ちがよいときは、「キュイ、キュイ」となきます。
- ・黒まめ（モルモットの名前）は、おじいちゃんだけど抱っこされるのが一番上手だね。
- ・マシュマロ（モルモットの名前）は、はずかしがり屋なのでかくれるのが好きです。
- ・モルモットは、はじめじめした所がきらいだから、風通しがよいところにおこう。
- ・マッサージをしたら、とても気持ちよさそうに、目をほそくしたよ。
- ・冷やしたペットボトルをゲージに入れると、クーラー代わりになるってじゅう医さんが教えてくれたね。



このように、児童は、自分で調べたことや獣医師からのアドバイスをよく聞いて、分かったことや気付いたことを観察カードに書き溜めていく。こうした活動を通して、鋭い観察力と表現力が育成される。

ウサギの世話は、5・6年生の飼育委員会児童が担当し、当番を決めて世話をしている。ウサギと触れ合う機会を自主的に企画し、全校の児童に呼びかけて11月と12月には低・中・高学年毎に2回ずつ実施した。委員会の担当児童はしっかり役割を果たしており、昨年度よりもこうした『ふれあいタイム』への参加児童が増えた。

3 獣医師との連携

(1) 生活科における動物飼育

① 第1学年

飼育活動の参観後、衛生管理に関する指導を1回、モルモットとの関わり方についての指導を1回実施した。1年生の課題は、飼育活動にまず慣れることで、モルモットが安心できる抱き方やストレスを少なくする方法について、具体的に指導を受けた。

② 第2学年

衛生管理に関する指導を3回、命の尊さについて学習する取り組みを1回実施した。モルモットの適切な餌の量や主食を牧草にすることなどの助言を受けた。また、夏季休業前に猛暑対策についての指導を受けた。

飼育日誌の重要性についても指導を受けた結果、児童は観察の観点について分担し、爪の伸び方、目や糞の様子まで丁寧に観察するようになり、飼育の連続性と責任感が高まった。

次に示したのは、獣医師のアドバイスの下、飼育の継続性を重視するために作成した飼育日誌の観点である。モルモットの健康状態を把握するために、どんなところを観察すればいいのか、児童と話し合いながら作成したものである。こうした取り組みを通して、健康の変化に気付いた児童は、更にその原因や対策を考えるという問題解決の学習が日常的に連続的に行われるようになった。

()のけんこうかんさつ			
月 日 ()			
●かんさつを	した	人 ()	
●ようす	げんき	げんきがない	
●えさ	たべる	たべない	
●うんち	ふつう	やわらかい	かたい
●目	赤い	赤くない	
●よだれ	出ている	出ていない	
●毛	ふつう	ごわごわ	
●たいじゅう	()	g	
●おんど・しつど	()		
●気づいたこと	()		

また、モルモットとの関わり方についても1年生と同様の助言を受けることにより、正しい抱き方を確認することができ、怖がらずに自信をもってモルモットと関わる児童が増えた。触れ合いの際のブラッシング、鳴き声の聞き分けなど、実践を通してモルモットがリラックスしている様子を把握できるようになった。

(2)委員会活動における動物飼育

飼育委員会ではウサギ小屋の環境改善と猛暑や防寒の対策について助言を受け、季節に合わせた飼育方法を実践することができた。



(3)小動物との体験活動

2年生の生活科の授業で、獣医師が心音計による人間(児童自身)、ウサギ、モルモット、カメレオンのそれぞれの心音について聞き比べる活動を企画し、小動物の命や寿命について身近に考え、慈しむ機会となった。

(4)研修会の実施

東京都教育委員会専門性向上研修で、都内の教員及び本校の教員が、モルモットの飼育の実態と小動物の飼育方法について、獣医師による指導・助言を受けた。特定の学年や担当の教員の責任だけに押し付けず、飼育についての理解を深め継続性を重視するために、校内全体で組織的に関わっていく重要性が認識できた。

(5)動物の健康管理問題発生時対応・埋葬等

モルモット等の体調の急変時には、その対応について獣医師からメールや電話で適切にアドバイスを受けられる体制が整い、安心して飼育活動ができるようになった。

3 保護者や地域等との連携

- モルモットやウサギの餌の提供
- 長期休業中における保護者ボランティアによるモルモットのホームステイ
- 1年生モルモット飼育時におけるアレルギーの有無に関するアンケートの回答

長期休業中における保護者ボランティアによるモルモットのホームステイでは、世話を継続している児童が主体となりつつ、餌や望ましい環境についてこれまでの学習の成果を基にまとめたマニュアル作りをすすめ、家庭でも安心して飼育できるよう配慮し保護者との連携を深めた。

また、2年生から1年生へのモルモット飼育の引き継ぎの際は、1年生の保護者へ事前のアンケートをとり、アレルギーの有無について確認、児童の実態を考慮して参加できる内容などを決めた。

4 学校で飼育動物を飼うことの意味

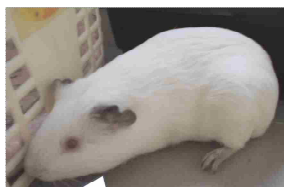
3匹のモルモットの死を受け入れる状況から飼育活動が始まってしまった昨年度の2年生は、飼育活動自体に自信がないことやモルモットと触れ合うことにも慣れていないため、はじめはモルモット飼育に消極的であったが、死の事実をきちんと受け止めることでモルモッ

トにとってより快適な環境を考えようと、図鑑やインターネットの情報などを調べ進めたり、獣医師への聞き取りを行ったり、実際に調べたことを試してみたりするようになった。こうした学習を通して自信をもった児童は、これまで通り5匹のモルモットを飼育したいと強く願い、校長にその思いを伝えるためのプレゼンテーションを工夫する学習へと高めていった。絵や写真を用いたり、クイズや紙芝居といった手法を駆使したりして、何とか私を説得してモルモットを前のように5匹に増やしてほしいという訴えで、テーマ別にグループをつくり、仲間と協力して行ったプレゼンテーションの工夫はそれは見事で、その内容の豊かさと深さに圧倒されたことを今でも鮮明に覚えている。取り組んだテーマが児童の気付きや問いによる主体的なもので、やらされているからではない意欲的な姿に、学習の質の高さを実感する場面となった。

私は、そのプレゼンを受けて、2年生にモルモットを増やすことを約束し、井の頭自然文化園の協力を得て、6月19日には、新たな赤ちゃんモルモット3匹を譲渡していただいた。この写真は、全校の児童向け広報の一部である。いきなり、昇降口で飼いはじめるのでなく、段階をおって、慣れさせていくことを重視した。こうした対応も、2年生の児童と考え、取り組んだものである。



今は、別のお部屋で過ごしています。



みんなとなかよくなりたいけれど、少し時間がかかります。



もうちょっと、待っててください！

こうして、モルモットの飼育を通して、主体的に学ぼうとする力を身に付けた児童は、日々の飼育活動にも精力的に取り組んでいる。飼育記録や観察を通してモルモットの変化を見付け、互いに報告し合い、獣医師に相

談したり、その指示を受けて早急に対応したりすることもできるようになった。

このように、単なる飼育活動ではなく、問題解決学習が連続的に行われ、鋭い観察力や表現力、飼育への強い責任感、友達との連携・協力、生命尊重の態度と思いやりの心、そして、低学年の児童にとっての究極のねらいである自立と豊かな生活への基礎が培われてきたといえる。

また、情緒的に不安定な児童が休み時間などにモルモットやウサギとの触れ合いを求め、気持ちの安定を図ろうとする場面が多く見られたことも大きな意味をもつと考える。赤松小は、全校の児童の目に触れやすい低学年の昇降口でモルモットを飼育しており、そこは、保健室の隣という場所でもある。そのため、様々な事情から教室に入れないで、保健室をよりどころにしている児童や、友達とトラブルを起こしたり、教師から注意されたりしたことがきっかけで情緒的に不安定になってしまった児童が、自らモルモットとの触れ合いを求めてくるのが度々見られる。「ここへ来ると落ち着くんだ。」と言い、クールダウンの場としてやってくる子が少なからずいることも見逃せない。

また、学校でモルモットの飼育に当たる児童を通して、更に家庭へのホームステイを通して、動物飼育の価値についての家庭への啓発にも大きく影響を及ぼしていることも付け加えておく。(ちなみに、昨年度の保護者評価で、動物飼育をはじめとする特色ある教育活動に関する満足度は、99%という高い評価を得ている。)

5 課題とその対応策

(1) 学校における動物飼育の価値の共有と組織的な対応

まず、動物飼育の価値を教職員間で十分捉え、学校独自のカリキュラムを作成すること。つまり、1・2年生の生活科の単元での取り組みを強化し、動物飼育を学校の特色ある教育課程として位置付け、そうした教育課程の管理を校長が確実に行うことである。その際、2年生から1年生への児童による引き継ぎについても年間指導計画の中にしっかり位置付けるな

どの工夫をし、継続性の確保を図ること。また、担当教師への事務的な引継ぎで終わり、一部の教員にその世話を押し付けるような体制ではなく、教員研修等を通して、動物飼育の価値を全教員で共有し、校内で組織的に関わることが重要である。

そうすれば、よく見られる「死んでしまったら終わり」でなく、そこからまた、学習を深化させていく、発展させていくことができる。そのために、生活科の年間指導計画への学校としての責任ある位置付けを行い、継続性をもった飼育活動の工夫が重要といえる。

(2)獣医師との連携や予算確保等の環境整備の構築

動物の命を預かっている責任の重さを受けた校内環境整備の充実や各学校で獣医師との連携を日常的に可能とする体制の構築が大きな効果を生む。しかし、専門性のある獣医師との連携強化や実際の飼育活動には、かなりの予算が必要である。そのための必要経費の確保や望ましい飼育場所の選定が重要となる。赤松小でも、獣医師との連携が深まったことが、児童による飼育活動、つまり、学習の質の深まりとなり、相乗効果となって表れた。

必要経費の確保においては、やはり、行政の理解が不可欠である。飼育場所の選定も重要である。校舎改築の折には、こうした動物飼育の

視点での場所の確保も十分に話題とすべきである。

(2)小学校生活の中で一貫した動物飼育による教育の在り方

動物飼育の取り組みは、生活科という教科を通した1、2年生だけのものであり、他の学年では行われていない。飼育委員会については獣医師から、飼育についてのアドバイスをいただき、日々の飼育活動に活かしているが、高学年になると小動物と触れ合う機会は、こうした委員会活動などに限られてしまう。動物飼育を通した学びが、小学校生活の中で一貫とした教育となって、高学年になっても継続できるように、学習計画やカリキュラムについて見直す必要がある。

6 おわりに

初めにESDについてふれたが、持続可能な社会づくりの担い手を育む教育の推進が求められている現在、改めて、動植物との共生は、重要なカギを担うといえる。そのためにも、動物飼育の教育的価値をもっと声を大にして発信すべきと考える。